慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リシエ綜合文化史論上巻(シヤール・ リシエ著, 間崎万里譯)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.194(574)- 196(576)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0194

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いふやうな意味で、國家は統一さるべきものであるといふ、國民精神の一つの理想が、素朴純眞な心持に現はされてゐる、と結んでをられるのである。(古神道は、本來現人神としての天皇崇拜であつて、靈としての天皇崇拜ではなく、これが後に、儒教の影響に依つて、古神道の本質を離れ、道徳的になつて、所謂祖先崇拜的に發達して來たのである。現實主義とでもいつたやうなことも、やはり現人神としての天皇崇拜といふものに結び附いて來る譯である、といはれてゐることにも注意すべきである。)

本書は、僅々六十頁の一小册子ではあるが、吾々祖國の眞相を傳へて遺憾なく、著者もいはれる通り、思想問題の對策としては迂遠のやうであり、又實際さうであるかも知れないが、祖國の理解は根本的な問題であるから、本書の如きは、現下の時勢に對して益するところ大であらうと思ふ。(四六判五十八頁、青年教育普及會發行、定價金參拾錢、淺子勝二郎)

リシエ綜合文化史論上卷 （シャール・リシエ著 間崎万里譯）

シャール・リシエ氏(M. Charles Richet)の著 Abrégé d'histoire générale: Essai sur le passé d' homme et des société humaine, 1919, 2e éd. 1922. の上卷の邦譯が本書である。先づ構成から見るに、先史時代からフランス革命直前までの時代が、「先史時代」、「エジプトと東方」、「ギリシャ」、「ローマ」、「教會」、「王權」の六篇に分つて論述されてゐる。第一篇「先史時代」に於ては、舊石器時代、新石器時代、青銅器時代及び鐵器時代と順を追うて人類

生活の進歩を述べ、第二篇「エジプトと東方」に於ては、エジプト人、カルデヤ人及びアッシリヤ人、ヘブライ人、フェニキヤ人、新アッシリヤ帝國、メヂヤ人とペルシャ人の六章に分つて、これ等各民族の歴史と文化に就て述べ、第三・四の兩篇に於ては、それ〴〵ギリシャ史とローマ史を敍述し、第五篇「教會」に於ては、三一二年より一四五〇年に至る時代、即ちキリスト教と封建制度とに由つて主として構成された時代を說き、最後の第六篇「王權」に於ては、一四五〇年より一七八九年に至る三世紀を取り扱ひ、封建制度に代つた西歐の統一的國家や、教會の權威が衰へて科學によつて人類が高度の文明を築くに至つた事實や、又はヨーロッパの歴史から全世界的歴史への發展や、諸國に於ける王權の伸張、殊にフランスに於ける王權の極盛と大革命への進展について論述してゐる。

全卷を通じて、著者はつとめて詳細に史實の說明をほどこし、以て讀者の蒙を啓くと共に、それ等の史實を綜合的に展示して、更に史實の深い意味を理解せしめんことを企圖してゐる。のみならず、著者は更に、年少者に對して正義と不正、自由と壓制、平和と戰爭、知識と無知との判定を示すべき使命の下に、殆どあらゆる史實に對して最も嚴正なる批判を加へ、是非善惡の論を樹て、以て如何に觀るべきか又は如何に考ふべきかを示してゐる。此の場合著者の採つた判定の尺度は、個人の尊重と科學の信仰と平和主義とである。

著者は人間の歴史を以て、一つの長い殉教者名簿なりと觀る。著者の個人尊重の精神はこれに現はれてゐる。ソクラテスとキリ

ストとジャンヌ・ダルクの處刑は、宗教の名に於て爲されたる歷史上の三大罪惡なりとなし、殊にソクラテスとキリストを以て、最も高貴なる殉教者なりといひ、彼等を犧牲に供した人間の無智を憎んでゐる。

元來科學者たる著者が科學を尊重し、科學が如何に人間の無智蒙昧に對して光明を與へたかを知らしめんとするのは當然であらう。科學讃仰の著者にとつては、印刷機の發明は最も重大なる事件である。卽ち著者は印刷機の發明を以て、人類史上の新舊兩時代を劃するものとなし、印刷機を有せざりしが爲に、思想の傳播の極めて緩漫なりし時代を舊時代と呼び、印刷機の發明以後、それによつて、一人の思想が幾多の人々に傳達され、萬人結束の力を得る時代を新時代と呼んでゐる。卽ち科學の時代は人類幸福の時代である。さて此の觀點に立脚して、著者は如何に十八世紀後半以後に於ける科學の時代を說き示すであらうか。我等讀者の興味は自ら懸つて此の點に存し、下卷上梓の日を鶴望する次第である。

著者の平和主義は殆ど至る所に現はれてゐる。武力や、武力の發動たる戰爭や、戰爭の結果たる征服や、又は征服の結果たる隷屬や、隷屬を維持せんが爲の專制政治が、最も强い言葉を以て非難されてゐる。如何に偉大なる英雄の行爲と雖も、著者に遭へば正義の鑑によつて嚴正に批判され、是非の斷定が下される。たとひ彼等の功業が魅力に富むとはいへ、その爲に、彼等によつて爲されたる罪惡や暴政が寬大に看過されることがない。斯くて著者がアレキサンダーの功業を賞讃せざるのみか、却つて兎角に閑却され勝な彼れの暴虐を指摘する。クセルクセスを以て「一人の狂亂せる專制君主」といひ、斯かる專制君主に率ゐられた征服戰爭を、「不幸なる光景」と觀るのは偶然でない。尙武に一貫したスパルタの精神を以て、アテネの文化を阻止した「不幸なるギリシャの精神」と號呼するのも肯かれる。

著者はフランス人である。從つて、若しや著者がフランスの文明を或はフランス人を特に偉大に評價するが如き傾向なきやを疑ふのは一應尤であらう。成るほど、著者は十八世紀の思想的解放運動に於けるフランス思想家の功績を强調し、ボルテールを以て「恐らく最も偉大なる」作家なりとし、「ボルテール王」なる稱號を承認して彼れを頌讃するが、然しルッソーに就ては、「愚劣にもその罪惡を鼻にかけた全く無能な奴」と罵り、かの「コントラ・ソシアール」に見ゆる人間は生來善なるに社會が之を歪めたりとする說を、「でたらめな意見」として唾棄し、有害な煽動家なりとして彼を葬り去つてゐる。著者の善惡正邪に對する識別は凡そ斯の如きものである。自國人なりと雖も非難すべきものは敢て容赦しないのが著者の態度である。

されど又、非難さるべき行爲の反面に、賞讃に値する行爲の存する場合には、これを稱揚することを忘れてゐない。例へば、アウグスッスの專制政治を非とするも、他面、彼によつて遂行された文化的事業を特筆してゐる如きがそれであり、又アテネの奴隷制度を呪ふと雖も、その民主政治を讃美する如きがそれである。

以上本書の特色の一班を述べたが、最後に、譯者に敬意を表することを忘れてはならぬ。原著者シャール・リシェ氏は科學者た

ると共に詩人でもある。此の詩人の手に成る述作が、達意に遺憾なく、洗錬された邦文に寫し出され、讀者をして開卷飽くことを知らしめざるは偏に譯者の努力に負ふものである。加之、所々に貴重なる註を加へて、讀者に深い理解を與へんとせられ、また個有名詞の原語を英佛兩國語を以て脚註に示され、以て讀者の便利を計られた譯者に心から敬意を表さねばならぬ。

歴史事實の單なる羅列に飽き足らざる人々は、必らずや本書によつて滿足を得るであらう。また史眼を養成せんと志す學徒は是非本書を一讀すべきであり、歴史教授の實際に當る人々も、本書によつてすぐれた指導方法を學ぶことが出來やう。更にまた、教科書に用ひて學生の批判力養成に資せんが爲にも好適の書である。良書の世に出されたるを深く慶とし、弘く我が讀書界に薦むる次第である。(東京・刀江書院發行、定價金參圓)(有賀春雄)

ブレステッド古代文化史（間崎万里譯 刀江書院發行）

現代を知らんと欲すれば、過去を知らねばならない。過去を知らんと欲する者は、人類文化の始原を以て認識の出發點としなければならない。こゝに古代史研究の必要が起つて來る。本書は邦文に成る西洋史文獻中稀に見る完璧の書であつて、西洋古代史を研究せんとする學徒の必讀すべきものである。

譯者間崎教授は、曾て成人教育に資せんものと、「成人」誌上にブレステッド博士の古代文化史を講述されたが、今回未掲載の部分が附加されて本書となつた。原書は A Short Ancient History

(1915)であつて、太古の人類生活からローマ帝國末期に至るまでの歴史が、詳細に叙述されて居り、各民族の活動、文化の様相及びその移動を最も明快に會得せしめる。何人も知る如く、ブレステッド博士はエジプトと東方の研究に最も造詣深く、現今に於ては此の方面、殊にエジプト研究に於ては世界の第一人者である。從つてエジプトと東方の記述は頗る詳細を極め、此の種の古代史に類を見ざる特色をなしてゐる。本書は素より博士の深い研鑽の結晶であるが故に、專門的であることはいふまでもないが、然かも同時に一般的でもあつて、初學者と雖も容易に理解することが出來る。

本書を繙く者は、何人も直ちに譯文の綿密にして流麗なるを知るであらう。權威の著述が最も勝れた譯者に依つて、完璧なる邦譯を得たといへば足りよう。のみならず本書は尚ほ多くの特色を有してゐる。原書に掲げられてゐる圖版は、僅かな變更を以て悉く挿入され、各圖版の説明も極めて丹念に譯述されてゐる。また原書の脚註が一として閑却されず掲げられ、更に譯者間崎教授自ら幾多の懇切なる註を加へられ、讀者に多大の便宜を與へられてゐる。また原書の各章末に附せられた研究問題は、本書には附錄として一括して掲載されて居り、更に本書の卷末に附せられた和文歐文兩種の索引は本書をしていよ／＼完璧たらしめてゐる。これ等によつて、吾人は何物をも忽にせられざる、教授の尊い學的態度を窺ひ知るべきである。斯かる良書を得た我が一般讀書界並に學界は幸福である。こゝに聊か本書の特色を述べて、弘く世に推薦する次第である。(有賀春雄)